



## 二千年ぶりの再会!!

-九州大学筑紫地区出土鋳型と東京国立博物館蔵品が一致-

**概要** 九州大学埋蔵文化財調査室では、平成 10 年に調査を行った筑紫地区地球大気動態シミュレーション装置建設現場から出土した、弥生時代後期(約二千年前・邪馬台国の直前頃)の巴形銅器鋳型を所蔵しておりました。その鋳型を埋蔵文化財調査室の田尻義了学術研究員が調査したところ、現在東京国立博物館が所蔵している香川県さぬき市森広(弘)出土の巴形銅器 3 点を鋳造した鋳型であることが判明しました。弥生時代の青銅器のうち、これまで九州から出土した鋳型と、製品が確実に一致したのは初めてであり、大変貴重な成果です。

### ■ 背景

今回の発見の成果は以下の 3 点にまとめることができます。

- ①弥生時代の青銅器において、銅鐸以外で鋳型と製品が確実に一致したのは今回が初めてである。
- ②九州(奴国)で製作された製品が、瀬戸内地方(香川県さぬき市)まで確実に運び込まれていた点が明らかになった。
- ③石製鋳型による鋳造が、確実に 3 回は可能であった点が今回の事例から明らかになった。

### ■ 内容

弥生時代の青銅器生産は大きく福岡平野を中心とした北部九州と、近畿地方に分けることが出来ます。後者の近畿地方は銅鐸の生産が有名で、鋳型と製品が一致した事例はこれまでも確認されてきました。しかし、北部九州における青銅器生産は、銅剣・銅矛・銅戈といった武器形製品が主体であり、さらにそれらの多くは文様が施されておらず、鋳型と製品が確実に一致すると認定された事例はありませんでした。今回の調査で鋳型と製品を実際に重ね合わせたところ、脚間の距離や脚の曲がり具合、脚裏面の中心線、座の径など各箇所一致し、本調査室所蔵の鋳型で製品を製作したということが明らかになりました。なお、巴形銅器は弥生時代のものが現在 36 点確認されており、それらのうち、今回の 3 点は北部九州で製作され、瀬戸内地方まで運び込まれたということが明らかになりました。当時の政治・経済ネットワークを考える上で、重要な事例となりました。

また、北部九州では現在 250 点以上の石製鋳型が確認されていますが、1 つの鋳型で何回の鋳造に耐えるのか不明でした。これまでの研究では製品同士の比較から、同じ鋳型で製作したのではないかと考えられてきた製品群が存在していましたが、今回の成果により確実に 3 回は同じ鋳型で鋳造が可能であるということが明らかになりました。当時の鋳造技術を復元する上で、重要なデータを得ることが出来ました。

### ■ 効果

今回の成果は弥生時代の青銅器生産と流通の一端が解明され、製品と鋳型の他の組み合わせがないかなど今後の研究の進展が期待できます。特に弥生時代の北部九州と瀬戸内地方の関係が、鋳型と製品の一致という紛れもない事実で確認できましたので、当時の政治・経済ネットワークを考える貴重な事例となります。さらには弥生時代の鋳造技術の復元に対し、重要なデータを提供することができ、今後の実験方法に影響を与えることとなります。

九州大学埋蔵文化財調査室には、まだまだ貴重な資料群が存在しております。今後も着実に歴史を紐解くため、研究を進めていく所存です。これからの研究成果にご期待下さるとともに、九州大学埋蔵文化財調査室をよろしくお願い申し上げます。

■ 今後の展開

今回の調査成果は、2009年1月1日より九州国立博物館にて『奴国の南-九大筑紫地区の埋蔵文化財』(仮称)企画展を予定しており、その場で一般に公開・展示する。

【用語解説】

巴形銅器・・・弥生時代後期から古墳時代前期にかけて製作された青銅器。巴の形態をしていることからこのような名称で呼ばれる。弥生時代に相当する巴形銅器は36点確認されており、九州から関東まで分布する。飾り金具に使用されたと考えられている。

【お問い合わせ先】

埋蔵文化財調査室 学術研究員 田尻義了

電話：092-642-2204

FAX：092-642-2204

Mail：maibun@scs.kyushu-u.ac.jp